

Discussion Paper Series

---

University of Tokyo  
Institute of Social Science  
Panel Survey

---

東京大学社会科学研究所 パネル調査プロジェクト  
ディスカッションペーパーシリーズ

手探りで模索するキャリア：  
大卒文系女子とライフコース

The Career and Life course of Liberal Arts Graduates in University

鈴木富美子  
(大阪大学)

Fumiko SUZUKI

March 2021

No.131

## 手探りで模索するキャリア——大卒文系女子とライフコース

### The Career and Life course of Liberal Arts Graduates in University

鈴木富美子（大阪大学）

**要旨** 1990年代後半以降、若者を取り巻く雇用状況は依然として厳しい状況におかれ、正規・問わず進行する雇用の不安定化は、単に雇用の場にとどまらず、結婚や出産・子育てなどの家族形成にも影響をもたらしている。これまで「普通」とされてきたライフコース—学校を卒業すると誰もが職（正規職）について安定し、いずれよい相手と出会って結婚し家族を形成する—を送ることが難しくなりつつある中、本稿では、ライフコースを構成する重要な要素の1つとなる職業キャリアに着目する。「やりたいこと」を掲げ、「自己分析」をベースにキャリアプランを描くという2000年代初頭に出現した「キャリア教育」のもと、「やりたい」仕事に就く難しさに加え、理系に比べ、具体的な職業・職種をイメージしにくい文系大卒女性たちが、どのようなプロセスを経て自分に合った仕事に出会っていくのかを、高卒パネル調査の一環として実施したインタビュー調査から検討した。

インタビュー対象者の語りからは、①自分に合った仕事を見つける試行錯誤のプロセスにおいて、「やりたいこと」に特化されない語彙—「嫌ではない」「多分好き」という感覚—の重要性、②そうした試行錯誤を支える友人、恋人、家族などのサポート・ネットワークの重要性、③ワーク・ライフ・バランスの問題は、子育て期などの人生のある一時点だけでなく、生涯という長いタイムスパンにわたり、向き合うべき課題となること、などが明らかになった。女性のライフコースは男性に比べ、年齢による人生設計を行いにくく、ワーク・ライフ・バランスを模索し続けることでライフコースも多様にならざるを得ないとすれば、多様化するライフコースをどのように制度的に支援していくのが今後ますます重要となる。

**謝辞** 本研究は、科学研究費補助金基盤研究(S)(22223005)、基盤研究(C)(25381122)、基盤研究(B)(16H03778)および厚生労働科学研究費補助金政策科学推進事業(H16-政策-018)の助成を受けたものである。東京大学社会科学研究所パネル調査の実施にあたっては、社会科学研究所研究資金、株式会社アウトソーシングからの奨学寄付金を受けた。パネル調査データの使用にあたっては社会科学研究所パネル調査企画委員会の許可を受けた。

## 1. はじめに

1990年代後半以降、若者を取り巻く雇用環境は依然として厳しい状況にある。中でも特徴的なのが非正規雇用の拡大である。雇用者に占める非正規雇用の割合は、男性2割、女性5割を超え、非正規雇用者として「初職」に就く割合も上昇している（総務省2013）。正社員を希望しながら非正規就業で働く「不本意型正社員」も増加する一方、正規雇用者における低賃金層の増加、雇用の安定度の低下、長時間労働化といった状況もみられ、正社員といえども「安泰」とは言い切れない状況も生じている（森2010）。

正規・非正規問わず進行する雇用の不安定化は、単に雇用の場だけにとどまらず、結婚や出産・子育てなどの家族形成にも影響をもたらしている（山田2004）。結婚時期を遅らせる晩婚化、結婚しない未婚化の進展のみならず、一生結婚しない生涯未婚率も上昇している。但し、若者が結婚を望まなくなったというわけではない。いずれは結婚しようとする者が男女ともに9割を占めるにもかかわらず、その実現が困難になっている。学校を卒業すると誰もが職（正規職）について安定し、いずれよい相手と出会って結婚し家族を形成するなど、これまで「普通」とされてきたライフコースを送ることはもはや難しくなりつつある。

こうした人生モデルやキャリアモデルを立てにくい時代において、本稿では地元の文系4年制大学を卒業し、地元で働く2人の女性対象者へのインタビューを取り上げる。職業（キャリア）はライフコースを構成する重要な要素の1つであり、2000年代初頭に若者の就労支援として出現した「キャリア教育」という名の下に、「自己分析」をベースとした就職活動が盛んに行われてきた。その「過酷」な状況は、小説や卒業論文の題材にも取り上げられ、話題となった（朝井2012; 双木2015）。

しかし、まず「やりたいこと」を掲げ、それへ向かってキャリアプランを描くような現在のキャリア教育のあり方に皆がなじむわけではない。とりわけ文系の場合には、理系に比べると、学校で学んできたことがそのまま仕事に活かせるとは限らず、具体的な職業・職種をイメージしにくい。自分にフィットする仕事かどうかは、やってみなければわからないし、仕事を続ける動機付けになりうるのは「この仕事がしたい」という強い思い入れだけではないだろう。「やりたいこと」という言葉に特化されてしまう「仕事」や「働くこと」に関する語彙の貧困さも指摘される中で（久木元2003）、強迫観念にかられた「やりたいこと探し」や職種探しではなく、働き方も含め、自分に合った仕事の模索にはいろいろなパターンがありうるのではないだろうか。

ここで紹介する2人とも、「本当にやりたい仕事」は別にあったが、それぞれの事情でそれとは異なる仕事からキャリアをスタートさせている。1人目の河本泰子さんは3回、2人目の澤田真紀さんは1回の転職を経て、今の仕事に辿りついている。河本さんには2014年12月の1回、澤田さんには2012年3月と2014年12月の2回のインタビューを実施し

た。2人の語りからは、試行錯誤し、手探りをしながら、仕事と向き合う模索のプロセスを読み取ることができる。

## 2. 河本泰子さんへのインタビュー

### (1) 「ブラック」な初職からの離脱

河本さんは3人きょうだいの長女で、2人の弟がいる。もともとグランドホステスとして空港で働きたいという思いがあり、高校卒業後は留学も考えていた。しかし、地元にはほしいという親の意向もあり、県内の大学で語学を専攻する。

最初の就職の時期は、父親が単身赴任中で、弟2人も関東の大学に進学し家を出ていたことから、「(地元) にいてほしい」という母親の強い希望を汲むかたちで、仕事もできるだけ転勤のないようなところでしようと考えていた。母方の祖母が小学校の教員だったことから、教育に興味をもち、専門学校事務・営業の職に就く。

仕事内容は、事務をしながら、問い合わせしてきた高校生に対して専門学校への入学を勧める営業の仕事も行うというものだった。しかし、実際の仕事は、会社説明会などで聞いていたものとは大きく異なるものだった。

河本：希望をもっている人たちを掬いあげる仕事だと思っていたんですね。その子が「こうしたい」と言うから、その夢を叶えるためにはこういう学校がありまして、という感じだと私は勝手に思っていたんですけど。ふたを開けてみたらもうぜんぜん違って、電話してきた高校生に対して、電話で「ああ言え、こう言え」とかって言って。あるんですよマニュアルみたいなものがあって、この人がイエスっていったらこういうパターンで対処するとか、そういうもう本当に営業トークみたいな。

河本さんが、この高校生には自分の学校は合わないと思っても、会社側は「探偵みたいなことをして、根掘り葉掘りいろんな情報を調べ上げ」、「絶対引きずり込め」などと指示を出していたという。

河本：例えばその子が希望しているものに対してうちの学校じゃないなって思うこともありますよね。ちょっと違っても、結局会社側からしたら「その子を逃がすな」という指令がくるわけで、その狭間で私は違うんじゃないかなって思って。結局、そこで学校を決めてしまったら、一生その子はその・・・(中略)・・・そこまでしてその子を例えば自分の学校に入れて、その子の将来は大丈夫なんだろうかみたいな、ていうふうに段々思ってきて、不信感を抱いてしまって会社に。

会社には皆の見えるところに営業成績のグラフが貼ってある。同僚の中には仕事と割り切ってやっている人もいたが、河本さんは会社への不信感が如実に数字に出てしまう。これから学ぼうとする人たちの手助けとなる仕事だと思い描いていたが、実際は「間逆だった」ことが判明、河本さんは胃潰瘍で体調を崩して入院し、6か月で退職することになる。ちなみに、この地区で採用された同期は6人だったが、今は誰も残っていないという。

## (2) 自分にあった職を模索する：3回の転職

その後、3ヶ月程休んでから、2つ目の仕事であるA大学の事務職に産休・育休の代替要員で採用され、2年ほど勤めていた。親族の紹介だったこともあり、希望すればもう少し居られたようだが、「ずっと事務をしているのが多分性に合わなかった」ため、大学の事務をしながら求職活動も行っていった。

そのような中、就職情報誌で探した3つ目の会社(商社)の正社員となり、営業事務を担当する。しかし、どんなに働いても残業代が一切つかず、体調を崩して辞めた人が会社を訴えて労働基準監督署が入るような状況だった。このため、「正社員というものが嫌になってしまっただけ」、仕事内容もあまり変わらず、仕事の経験を活かせるような職場ということで、1年ほど前に現在の職場に派遣として転職した。この会社は合併を目前に控えており、「いずれは直接雇用になる」と言われたことも転職の後押しになった。

仕事内容は前職と同じ営業事務を担当している。フルタイムの契約社員(3ヵ月ごとに更新)として、週5日は毎日ほぼ2時間の残業があり、定時に終わることはほとんどないが、土日はほぼ完璧に休める。キャリアアップのために日商簿記2級の資格も取得した。転職を繰り返すうちに、徐々に自分にどんな仕事合っているのかが見えてきたという。

R : 営業事務みたいなものをやりたかったという感じですか？

河本 : いろんな仕事をしてきて、一番楽しいとかっていうわけではないですが、何か淡々と事務するよりか誰かと何かを、誰かの補佐みたいな、誰かを助ける仕事のほうが向いているんだというのは、何となくそのブラックの会社(3番目の商社)でしたけど気づけたので。(大学の事務は)もうずっとこうやって、時間になったら「お疲れ様でした」という感じなので。もうそれが合う人もいますし、私はどっちかっていうともうちよっとな。

R : コミュニケーションとか？

河本 : そうですね。電話だったり人とだったり、会話するほうが向いているのかと気づきましたね。

現在の仕事（営業事務）については、残業も多いし、大変だといいつつもやりがいを感じている。

河本：結局、そこに自分がいないと何も仕事が運ばないわけじゃないですか。だからそういうのが好きなんだと思うんです、責任も伴うのはそうなんですけど。その場に自分がいることで円滑に事が進んだり、潤滑油になるような仕事が多分好きなんだと思うんですよね。

R：今の仕事で体を壊したことはないですか？

河本：それは大丈夫です。さすがにそこまでは、ストレスっていうか身体的に疲れることはありますけど、心は疲れないので。

### **(3)「模索」を支えたソーシャル・サポート**

河本さんは最初の会社で胃潰瘍になったときに友人や親に相談し、「誰も（辞めることに）反対する人が居なかった」こともブラックな会社と縁を切る後押しとなっていたが、これまでも母親には、大学進学や就職のときにもいろいろな相談をしてきた。父親は10年近くも単身赴任だったこともあり、進学や就職のときも父親には報告はするけれども相談するという感じではなかったという。「やっぱり思春期を一緒にお父さんと過ごさなかったっていうのは多分私にとってかなり大きかったみたいで、いまだに父親とはちょっと怖いというか、あんまりそんなに距離が縮まらない」と語り、父親との接し方に戸惑っていた。一度、父親と大喧嘩をし、家を出て行こうと思ったが、母親に「お母さんを置いていかないで」「一人ぼっちにしないで」と止められてしまう。それ以降、河本さんは父親に反発すらしなくなり、お互い干渉せず、沸点到触れないように、少し歩み寄る感じになったという。これに対し、「自由主義」で「好き勝手やんなさい」という母親からは、これまで何かを頭ごなしに言われたことはない。現在も実家暮らしのため、週の半分は夕食をとりながら母親と話をする。その際に、お互いに話し相手になったり、悩みを聞きあったり、よく会話をしている。

1年ほど前から会社の同僚と付き合っているが、仕事に対する河本さんの取り組み方を評価し、応援してくれる彼の存在も現在の河本さんにとって大きな支えとなっている。

河本：ちょっと支えみたいのができた感じはしますかね。誰か自分のことを見てくれる人がいるというか、この仕事の頑張っている姿をみて、なんていうのか、応援してくれる人が増えたっていう感じで・・・(中略)・・・応援メッセージじゃないですけど、やっぱりそういうふうに言われるとうれしいですし、それこそもっとがんばろうっていう気にもなりますし。

#### (4)「普通」にこだわらずに生きる

最近、結婚を具体的にイメージするようになったが、彼は父親の経営する会社を継ぐために故郷へ戻ることになっており、河本さんも今の仕事を続けることはできない。このため、将来、仕事を再開するときに「自分の強みみたいなものがない」ことへの不安も語っていた。しかし、「女性だからっていうのも多分あるとは思うのかもしれない」と前置きしたうえで、もともと仕事については「挫折を何回も経験」し、これまでも「その場その場で自分のできることをやってるだけ」だったので、「絶対正社員になりたい」とか、「絶対こうだって」いうふうには思っていないとして、これからも柔軟に対応していくことへの自信をのぞかせていた。そうした考え方もつきっかけ、転機はやはり最初の会社における経験であった。

河本：一番印象深いというか、一番今思うと変わったと思うのは、一番最初に新卒で入った会社で体を壊して、そのときに1回挫折したことが今となればよかったと思いますね。つらかったはつらかったですけど、ちょっと甘々だったところがあったというか、何というか、当たり前なんですけど22歳で世間に出て社会人になって。・・・(中略)・・・あのとき例えば仕事を受け入れて成績とかでもトップを取ってちょっと天狗になってしまっていたら、きっと冷たい人間になってたんじゃないかとかそういうふうには思いますね。・・・(中略)・・・人に何かを勧めるのに、自分の気持ちを押し殺してまでやるってことはできなかったんで、なんか自分に気づかされたというか、冷たい人間にならなくてよかったと本当に思いましたね。

河本さん自身、小学校、中学校、高校と「平均的」にやってきて、「普通に」大学に入り、「普通に」就職して、「普通に」それなりの年で結婚して子ども産むと思っていたのが、「半ば早めに途切れてしまった」。

河本：そこでちょっと自分は変わったというか。今の仕事もあるのもきっとあそこで挫折して、こういう仕事は違うんだとか、A大に行って、何だろう、内勤がいいと思ってたけど、ずっとひたすら何かをし続けるっていうのは性に合わないんだとか。今となってはあれが転換期で、挫折をして気付いて、その連続で今に至ったのかとは。

周りには、河本さんのように何回か転職している友人もいるが、新卒で入った会社に勤め続け、既に8年ものキャリアを積んでいる友人もたくさんいるという。「何かずっと続けて一つの何かに対してのキャリアを積」み、「ずっと何か突き通している」友達をみると、う

らやましさをまぶしさを感じることもあるが、「挫折」を繰り返してきた自分の人生を次のように締めくくってくれた。

河本：今となれば線で結ばれてつながってますけど、一つ一つをみると点でしかなくて。やっとなんでしょう、(学卒後) 8年、30(歳を)前にして20代が終わりになるときに、やっといろいろなことが線となって結ばれて今に至ったんだとは。・・・(中略)・・・きっと自分はそういうふうにはかできなかったんだろうと今になっては思いますし、きっと20代はそれでよかったんだと思いますね。いろいろなことがあって、その波に乗ってふらりふらりやってきた自分が。

### 3. 澤田真紀さんへのインタビュー

#### (1) 「本当にやりたい仕事」と初職

澤田さんは1人っ子で両親と3人で暮らしている。大学進学の際、経済的な面から「私立の東京の大学はやめて」と冗談交じりに親からいわれる。自分自身もあまり出る気もなかったもので、県内の大学で歴史を専攻し、大学で学芸員と教員資格を取得する。

就職の際には、本当は博物館や歴史に関わる仕事に就きたいと思い、実際、その方面で仕事を探した。しかし、嘱託社員としてのポストしかなく、倍率は「500倍くらいになっちゃう」ほど高いわりに、給料は「それ(実家暮らし)を差し引いても苦しい」ほど低いことからあきらめる。教員資格も取得していたが、塾講師のアルバイト経験から、「今の先生のおかれている状況を見ると、よっぽど先生になりたいとか、よっぽど子どもが好きでないと無理、無理な職業」だと感じたという。

当時は就職しやすい時期とされていたが、県内の私立女子大出身者にとってはかなり厳しい状況だったため、「正直な話、就職できればどこでもいい」と考えていた。大学で就職のための自己診断を行い、接客に向いていると診断されたことが後押しとなり、ホームセンターに正社員として就職する。そのホームセンターは、東日本で店舗を展開し、2~3年に1回は転勤があることから、就職の際には、転勤のない地区を限定した社員を選択した。

R1：接客をされていてどんな感じですか？

澤田：うーん、一番感じるのは多分自分が成長してるなっていうのが、うん。成長したのか大人になったのか、あれですけど。接客にじゃあ向いてたかって聞かれるとそれはまだ分からないんですけども。・・・(中略)・・・人との接し方を学んだ感じがしますね。

R2：じゃあその接客に向いているっていう感触はそれは今でも変わらない。

澤田：うーん、どうなんですかね。でもやっぱり同じ職場とかでいても、この人ってすごく接客上手いなって思う人もいますし。で、人と考えるとじゃあ自分が接客向いてるのかなっていうとちょっと何とも言えないところもあるんですけど。でもやって大変ですけども嫌いではないです（2012年3月）。

ホームセンターなので男性客向きの商品も多く、正しい説明をしても客（男性）が納得しない、理不尽に怒られる、柄の悪い客が多いことに大変さを感じている。そのような際も、男性社員があまり協力的でなく、悔しくて涙することもあるが、知識が身につくこと、客からありがとうと言ってもらうこと、名前と顔を覚えて声をかけてくれることに楽しさやうれしさを感じている。また、研修制度として会社の費用負担で取得できる資格があり、澤田さんにも適用され始めている。こうした資格の取得や講習会への参加については、正社員/パートといった就業形態に関係なく機会が与えられ、他社より充実しているようだ。

## **(2) 転職に悩む：仕事とライフコース**

一方、仕事についての不安もある。10年ほど前から大卒の採用が増え、同期70名のうち、20名が大卒女子である。しかし、会社が「閉鎖的」なため、正社員の大卒女性がどの店舗に配属になっているのかが一切わからず、つながりがない。また、長く勤めている女性はごくわずかで、しかも未婚者であることから、結婚すると働けない状況にある。特にネックになっているのが2～3年に1度の転勤である。夫婦が同じ店のな場合には、どちらか（たいていは女性）が出されてしまう。澤田さん自身、頻繁に転校した経験がある。その苦労を考えると、2～3年に一度の転勤に伴う転校を自分の子どもに強いて、同じ気持ちを味あわせるのはかわいそうだと考えており、将来の働き方について、次のように語っている。

澤田：私はまあ、私自身はまだ全然結婚する気とかっていうのはないので、しばらくは正社員で働くと思うんですけど。ただ実際結婚してってなると、もちろん夫となる方の状況にもよると思いますけど、このままだったら正社員は辞めざるを得ないんじゃないかなっていうのは・・・(中略)・・・今、実家暮らしなんですけど、(勤務先を)実家周辺のお店でっていう限定にしていたので、辞めなかったとしても、もしかすると夫となる方とは単身赴任になったりとかっていうのもあり得るんじゃないかなとは思いますがね（2012年3月）。

さらに、頻繁な転勤は、店の制度や内情のやり方の頻繁な変化をもたらす。店の運営に関わる4人ほどの上司が入れ替わり立ち代り転勤し、その都度、店の内情がかなり変わるため、それに対応していくのも大変だという。このように職場に対する不安材料も話しつつ、転職

について積極的かといえばそうでもない。

澤田：あ、まあ別にそれに関係なく辞めたいって思う事は多々あるんですけども、ただ、今転職っていうのも考えた事ないわけじゃないですし、今も考えてないわけではないんですけども、じゃあうーん、じゃあいざ転職する、しようかっていう踏ん切りがつかないですね。・・・(中略)・・・どちらかと言えば接客する事が嫌いではないですし、上司を差し引いて今、お店にいるメンバーが嫌いではない。・・・(中略)・・・本当は欲を言えば本当にそれこそずっと就きたかった歴史関係の仕事に就いてっていうのはありますけど。できないなら現状維持でも良いかな (2012年3月)。

その一方、「今の会社がこの現状維持を許してくれるのかな」という不安もある。

澤田：もちろん日本という社会として将来の不安っていうのは感じますね。それこそ老後の不安みたいな。お金、まあお給料からちょっとずつ貯めてるって言いましたけど、それ将来の為っていうのは私の将来の為ってもう老後なんですよ。その時の為に向けてもうお金貯め始めてるってぐらいなんで、どうなっていくのかなってちょっと思いますね (2012年3月)。

### **(3) 転職の理由と現在の仕事**

このように語っていた澤田さんだったが、そのインタビューの約半年後にホームセンターを辞め、通販会社のコールセンターに転職していた。ちょうどその時期に、その会社が人手を増やす時期だったため、うまく転職できたという。転職の理由は、会社の運営や上司に対する不満もあるが、接客業を続けたいというのが主な理由であった。

澤田：ホームセンターでは、サービスカウンターでお客様と直に対応する仕事についていたんですけども、なんかそういうお客様とのやりとりをずっとやり続けたいと思って。やっぱりホームセンターだと、転勤すると部署が変わったりすることもあった。だったらもう、本当にお客様対応を中心としたところに行きたいと思ったのと、あとちょっと人間関係に疲れちゃって、これを機会にと思って転職しちゃった感じですね。・・・(中略)・・・俗に言うブラック企業みたいなどころもあったりして。サービス残業するのが当たり前みたいな風潮だとか・・・(中略)・・・でも一番は、やっぱりその職場の部門とかが変わってしまうっていうのがネックだったんで (2014年12月)。

転職先は、最初に契約社員で入り、1年くらいで正社員になる。そのときも昇格テストがあったわけではなく、自分の普段の成績（対応）で決まるところも前の仕事とは異なる。

澤田：前の会社だとレポートを出したり、テストを受けたりというところがあって、いくらお客さんに感謝されてても、試験の成績やレポートが出せなければ、結局、上に上がれない。自分の本当の頑張りが重要視されていない感じがして。今は逆ですかね。・・・(中略)・・・お客さまからどのくらい、そういうお礼の言葉をもらっているとかで決まるところがあったり。

R1：成績ってというのはどういうことで判断されるのですか？

澤田：1時間のうちに電話何本対応したかだとか、・・・(中略)・・・、お問い合わせいただいた際に問題が解決したかっていうことで、必ずアンケートとかを送信していて、そのアンケートも取ってきて解決したってもらった数がどのくらいとか、パーセンテージとかで（2014年12月）。

以前の会社に比べると、人事面や福利厚生面などが充実し、上司の対応もきちんとしていることなどが働きやすさにつながっている。澤田さんも当面は今の接客業を続けながら、いずれは教育を担当するなどのステップアップを考えている。

#### **(4) 転職を支えたソーシャルサポート**

転職にあたり、日常的によく会話をしている母親には相談し、「いいんじゃない」と同意を得られた。父親に相談しなかったのはそれなりの理由があった。

澤田さんは就職早々、初めての1人暮らしを2年ほど経験している。そこには知り合いもおらず、店舗同士の交流がないため同期の女性がどこにいるのかもわからず、「話せる人がいないのが辛かった」。就職したばかりだったこともあり、仕事の悩みがあったが、「パートさんに言えるかっていうと、ちょっとまたね・・・」という状況の中で、実家に毎日電話をしていた。その後も親に相談してきたが、父親にはどこか違和感を感じてきた。

澤田：何かやっぱり男性だから考え方が違うんですよね。世代も違うからかもしれないんですけど。極端に思うのが父親の世代って本当に戦後の世代なんですよ。本当に高度成長期で、日本が成長してって成長が見えてると思うんですよ。バブルもあってみたい。本当にこう成長して成長してって右肩上がりのところをやってきて、ただ逆に私たちって今、落ちよう落ちようっていうのを必死にこう止めてるっていう事なんで、全然頑張っても伸びるっていうのが想

像もできないし、予想もできないし。・・・(中略)・・・そんなに「頑張っ  
て」とか「乗り越えて」って言われても、じゃあ頑張ってじゃあ給料がバンと上  
るとか、階級がバンと上がるかっていうとそういうふうには全然見えない  
んで。ちょっとずれてるなって。

R1：お父さんが「頑張っ」とかって言う・・・

澤田：そうなんですよね。「そんな事ばかり言ってないで」とか、「ここをこう頑  
頑張って乗り切れば成長する」とか。うーん。そうかなー、みたいな。

R1：お父さんもじゃあ聞いてるんですね、話を。

澤田：でもやっぱりちょっと・・・。私も相談に乗って欲しくて言うんですけど、返  
って来る答えが何かちょっと違う (2012年3月)。

これに対し、母親は組織で働いた経験はなく、「相談っていても多分、私が愚痴を聞い  
てもらっているだけみたい」な感じだが、母親との会話にはどこかに納得感を感じている。

澤田：母親はとりあえず、話、愚痴り、愚痴なんですよね。でもやっぱり母親は女  
性、女性としての考えが合うところはあるんで。聞いてもらって、(母親に)  
言われることが結構、女性として何かちょっとストンと落ちるところを言  
われたりして。同意してくれるっていうか、それで別に私が求めたこと答え  
じゃなくても同意してくれすんで、まあスッキリする、安心するっていうと  
ころはありますね (2012年3月)。

こうした状況もあり、今回の転職の際も父親にはしなかったため、「勝手に決めて・・・」  
と言われたが、最近、父親も転職先の会社の将来性などについて理解してきたという。

#### **(5)「普通」にこだわらずに生きる：「結婚はしなくてもよい」**

澤田さんは、大学のときの友人とはあまり連絡をとっていないが、就職してから趣味が合  
う仲間と Twitter で出会い、一緒に旅行へ行くなどして趣味 (アニメや歴史) の世界を楽し  
み、自分のことを「オタク」と称する。話題も趣味に限らず、落ち込んだときには互いに電  
話もするが、結婚の話題はあまり出ないし、自分自身、それほど考えていない。

澤田：結婚はそんなに考えていないんで。自分が死ぬまで、ちゃんと生活できるぐら  
いには稼いでいけるようになっていきたいですね。・・・(中略)・・・もう今の生  
活で事足りてるっていうのと、あと結婚したことによって、その生活が崩される  
のが嫌だっていうのと、とてもじゃないけど今の給料じゃ結婚とか子育てなん

てできるはずがないので。面倒くさいのかもしれないですね（2014年12月）。

澤田：多分そんなに要領がよくなって、いろんなことってできないんですよね。仕事やって、友達とお付き合いして、趣味をやったりとかしてっていうのが、そんなにあちこちでできない。・・・（中略）・・・キャパが少ないんで。それに彼氏とか旦那が入ってくると、多分とてもじゃないけどやれる自信もないですし（2014年12月）。

2012年のインタビューで30歳になった時にどんな暮らしをしたいのかを尋ねた際に、澤田さんは「現状維持」と語り、「今の会社がこの現状維持を許してくれるのかな」という不安をもらしていた。澤田さんからは、その後の転職でやりたかった接客業に特化できたこと、また結婚・出産などを考えなければ「現状維持」を一生通じて担保してくれる（であろう）職場を見つけたことへの安心感が垣間見られた。

#### 4. 考察

以上、大学卒業後に初職につき、現在に至るまでの仕事の変遷を2人の女性の語りから追ってきた。ここからみえてくることを3点あげておこう。

##### (1) 仕事をしながら、手探りで模索する

1点目は、それぞれの事情で2名とも初職で「本当にやりたかった仕事」に就いたわけではなく、手探りで仕事を模索してきた点である。その際に、彼女たちが手がかりとしたのが「嫌ではない」「多分好き」という感覚である。

河本さんはグランドホステスという仕事は地元で暮らしてほしいという家族の意向と合わなかったし（河本さん）、正規の職員として博物館の学芸員になることは大変な「狭き門」であった（澤田さん）。このため河本さんは興味のあった教育産業の営業職、澤田さんは適性検査の結果を参考に就いた接客業から、彼女たちの模索のプロセスがスタートする。河本さんは強引な営業経験で体調を崩したあと、大学事務、商社の営業事務などの仕事に携わる過程で、営業事務が「一番楽しいとかっていうわけではない」が、コミュニケーションをしながら「潤滑油」になるような仕事が「多分好き」ということに気づく。澤田さんも当初は接客業に対し、「嫌いではない」という程度の認識であったが、その後、接客を主にやりたいと考え、コールセンターに転職するとようになる。

これまで、「やりたいこと」へのこだわりが逆に就労から遠ざけてしまうとして、「やりたいこと」へ過度に固執せずに、とりあえず仕事を始めてみるという処方箋が提供されてきた（香山 2004; 玄田 2005; 三浦 2005）。河本さんや澤田さんが仕事を模索するときの手が

かりにしてきた「嫌ではない」「多分好き」という感覚は、「やりたいこと」に比べると地味ではあるが、とりあえず仕事を始める際の「とっかかり」の語彙となりうるのかもしれない。

## **(2) 試行錯誤を支えるサポート・ネットワークの重要性**

2点目は、そうした試行錯誤を支えるサポート・ネットワークの重要性である。それは友人や恋人、家族の場合もあるだろう。仕事の悩みの相談や励ましはもとより、話を聞いてもらうだけでも、当事者は安心感や納得感を得ることができ、大きな支えとなる。

河本さんの場合には、最初のブラック的な専門学校からきちんと辞めることができた背景には、友人や親からのサポートがあった。恋人からの承認は河本さんへの「応援メッセージ」となり、「もっと頑張ろう」という気持ちの源となっている。親との関係についても、母親には大学進学や就職のときから相談をし、お互いに話し相手になり、悩みを聞き合うなど、よい関係が築けている。

澤田さんの場合にも、仕事をしていく上で趣味を通じて知り合った友人や母親の存在が支えとなっている。母親は組織で働いた経験はないものの、母親との会話からは安心感や納得感が得られ、また転職の際には母親からの同意が転職を決心する「援護射撃」となっていた。「求めた答えを得られなくても」、ただ愚痴を聞いてくれて、同意してくれる相手がいるということの重要性を読み取ることができる。

なお、両者ともに、父親と母親とでは関係に大きな違いがあった。河本さんの場合には、父親は10年ほど単身赴任だったこともあり、いまだに父親との距離は縮まっておらず、父親との接し方に戸惑っていた。澤田さんの場合には、初職についたときに仕事の悩みを相談したとき際に、諭そう、励まそう、という教育的・教訓的な父親の言葉に違和感をもつ。二人の語りからは、親子関係の重要性だけでなく、父娘のコミュニケーションの難しさおよび円滑にするヒントなどを垣間見ることができる。

## **(3) ワーク・ライフ・バランスの模索と多様化するライフコース**

3点目は、彼女たちは今後も、自分自身の人生において、仕事とどのように向き合っていくのか、どのように折り合いをつけていくのかというワーク・ライフ・バランスの問題と向き合い続けることになることが予想される点である。

河本さんは結婚後も今の仕事を継続することは難しいとしつつ、将来、仕事を再開することを念頭において、これまでの挫折の中で培ってきた柔軟なキャリア観で対応していけるのではないかとの気持ちをのぞかせていた。また澤田さんは、接客を中心にやっていきたいという仕事内容へのこだわりが転職の直接的な動機だったが、結婚や出産・子育てを視野に入れた家族形成や老後も含めた将来の生活設計を考えた際に、前職の働き方に対する不安—転勤や配置換えが多く、長く勤め続けている女性が少ないことなど—が転職を後押しす

る要因となっていた。

少子高齢化の趨勢の下では、女性たちが生涯にわたり仕事を持ち続けることは恐らく不可避な状況となるだろう。その一方、結婚や出産などの家族形成や介護などを含め、さまざまなライフイベントに直面し、それまでの人生設計を柔軟に修正する必要に迫られる状況は、依然として女性のほうにより多く発生すると思われる。ワーク・ライフ・バランスの問題は、子育て期などの人生のある一時点だけでなく、生涯という長いタイムスパンにわたり、向き合うべき課題となる。女性のライフコースは男性に比べ、年齢による人生設計を行いにくく、ワーク・ライフ・バランスを模索し続けることでライフコースも多様にならざるを得ないとすれば、多様化するライフコースをどのように制度的に支援していくのが今後ますます重要となる。

## 引用文献

### 参考文献

朝井リョウ，2012，『何者』

玄田有史，2005，『働く過剰——大人のための若者読本』NTT出版。

双木あかり，2015，『どうして就職活動はつらいのか』大月書店。

香山リカ，2004，『就職がこわい』講談社。

香川めい，2010，『自己分析』を分析する——就職情報誌に見るその変容過程」荻谷剛彦・本田由紀編「大卒就職の社会学——データからみる変化」，171-197，東京大学出版会。

児美川孝一郎，2013，『キャリア教育のウソ』筑摩書房。

久木元真吾，2003，『やりたいこと』という論理——フリーターの語りとその意図せざる帰結」『ソシオロジ』第48巻第2号：73-89。

——，2009，『若者の大人への移行と『働く』ということ』小杉礼子編著『若者の働き方』，202-227，ミネルヴァ書房。

三浦展，2005，『仕事をしなければ、自分はみつからない——フリーター世代の生きる道』昌文堂。

鵜飼洋一郎，2007，「企業が煽る『やりたいこと』——就職活動における自己分析の検討から」『年報人間科学』第28号：79-98。

## 東京大学社会科学研究所パネル調査プロジェクトについて

労働市場の構造変動、急激な少子高齢化、グローバル化の進展などにもない、日本社会における就業、結婚、家族、教育、意識、ライフスタイルのあり方は大きく変化を遂げようとしている。これからの日本社会がどのような方向に進むのかを考える上で、現在生じている変化がどのような原因によるものなのか、あるいはどこが変化してどこが変化していないのかを明確にすることはきわめて重要である。

本プロジェクトは、こうした問題をパネル調査の手法を用いることによって、実証的に説明することを研究課題とするものである。このため社会科学研究所では、若年パネル調査、壮年パネル調査、高卒パネル調査、中学生親子パネル調査の4つのパネル調査を実施している。

本プロジェクトの推進にあたり、以下の資金提供を受けた。記して感謝したい。

文部科学省・独立行政法人日本学術振興会科学研究費補助金

基盤研究 S：2006 年度～2009 年度、2010 年度～2014 年度 基盤研究 C：2013 年度～2016 年度 特別推進研究：2015 年度～2017 年度 若手研究 A：2015 年度～2018 年度  
基盤研究 B：2016 年度～2020 年度 特別推進研究：2018 年度～2024 年度

厚生労働科学研究費補助金

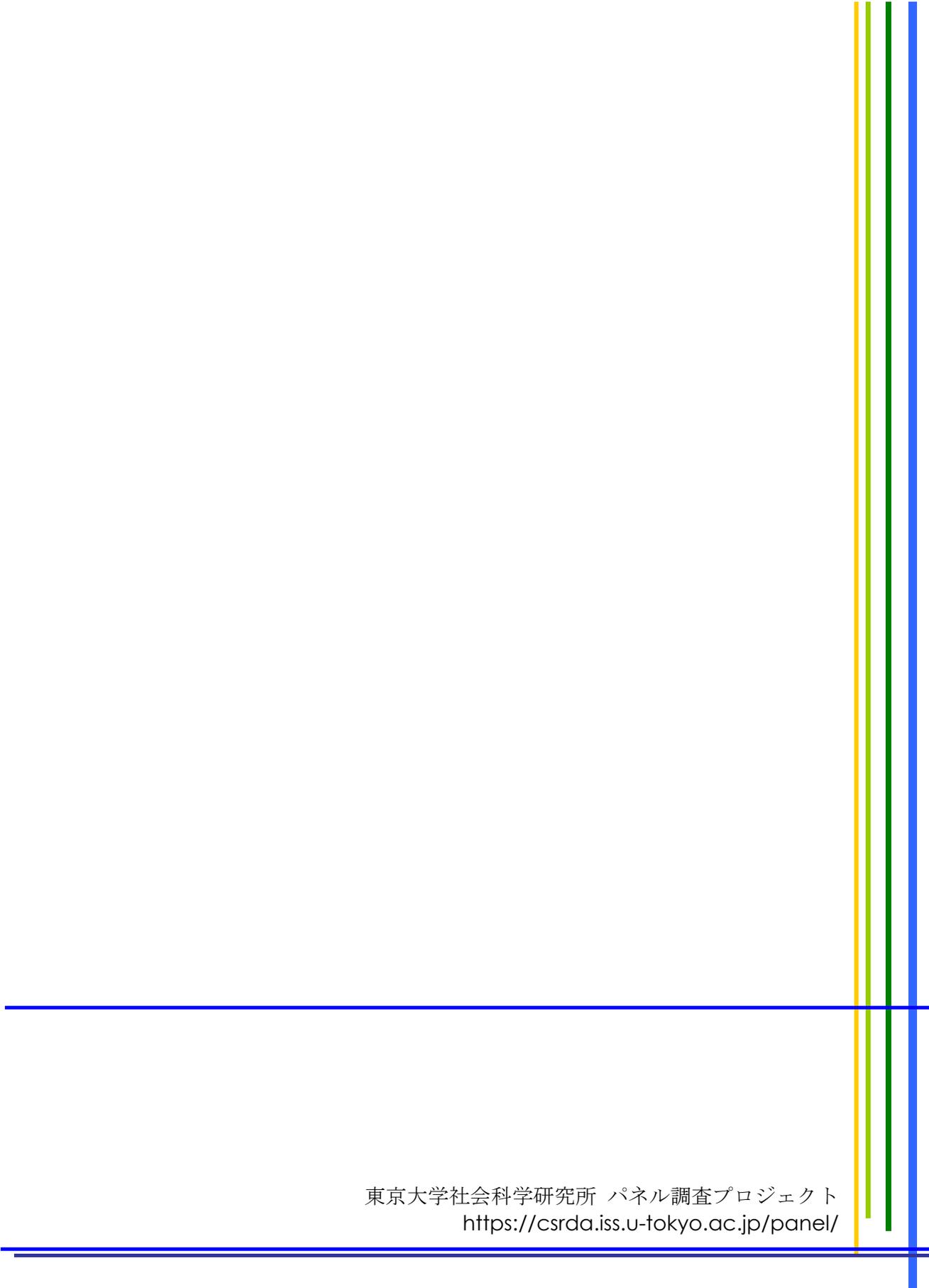
政策科学推進研究：2004 年度～2006 年度

奨学寄付金

株式会社アウトソーシング（代表取締役社長・土井春彦、本社・静岡市）：2006 年度～2008 年度

## 東京大学社会科学研究所パネル調査プロジェクト ディスカッションペーパーシリーズについて

東京大学社会科学研究所パネル調査プロジェクトディスカッションペーパーシリーズは、東京大学社会科学研究所におけるパネル調査プロジェクト関連の研究成果を、速報性を重視し暫定的にまとめたものである。



東京大学社会科学研究所 パネル調査プロジェクト  
<https://csrda.iss.u-tokyo.ac.jp/panel/>